北垣先生：私の指導教授

杭州師範大学准教授
叶　　林

北垣先生は，私の留学時代の指導教授（主査）だった。先生が広島大学高等教育センターに赴任した1年後，私も，当該センターの博士前期課程に入学した。その後の五年間（2002年～2007年），先生から厳格な指導を受け，更に，学会発表の支援から日常生活サポートまで，様々な面で見守ってくださった。先生のお人柄，優しさの中の厳しさ，仕事に対する真面目さなど今でも強く印象に残っている。『北垣郁雄教授退職記念特集号』の執筆を頼まれた際に，私はすぐに承諾した。感謝の気持ちを込めて，先生から学んだことを述べてみたい。

＜新たな高等教育方法論を学んだ＞

北垣先生の講義を受けた経験がある学生たちは，おそらく私と同じ感想を持っているだろう。それは，今まで受けた高等教育の授業というイメージからは，少しかけ離れたことであった。先生の授業が私にとってものすごく楽しい遊びのように感じられたことだった。一例を挙げてみよう。

高等教育講究授業の前に，北垣先生が以下の宿題を出した：「多肢選択式テスト問題と選択肢を作っておいてください。要件：(1) 誰でも知っている易しい問題でなく，また，ほとんど誰にも分からない難題でないこと。(2) 題意から選択肢の数が暗に特定できないこと…　(3) 非常に学力の高い人が見れば，正答の選択肢を見たとき，それ以外の選択肢を見るまでもなく正解と特定できるような選択肢群であること。…当日，各自で用意するもの：A4程度の大きさのボール紙4枚，30cm程度の直線定規，はさみまたはカッターナイフ，えんぴつ，消しゴム，マジックインクまたは大きな文字を書けるサインペン，100円玉30枚」。結局，ゲーム論的出題様式に関する知識を教えてくださった。

北垣先生の講義を受けるまでは，高等教育の方法論，特に高等教育と情報メディアの関係ということについて深く掘り下げて考えてみることはあまりなかったが，新しい視点から「教育の内容や方法のさまざまな事例を素材として，高等教育を学ぶ。そして，教材開発に関しては，情報メディアの活用を図る」という北垣先生の講義は，大変濃い内容のものであった。

＜大学教員の姿勢を学んだ＞

私の学究生活のスタイル，そして教育研究への姿勢の基礎を築いてくださったのが日本人の先生達だった。北垣先生にも大学教員として大切な姿勢を教えていただいた。以下，三点ほどを述べてみたい。

（1）謙虚心

謙虚な心を持って人と接することは，良好な教師－生徒関係を築くためには非常に大事なことだと思う。広島大学に在学中，Ｆテレビがわがセンターに取材で来た。同テレビ局の依頼に応じて，センターの院生たちは番組撮影に参加した。しかし，実際に放送するとき，われわれの映像がまったく放映されなかった。当時この用件を担当した北垣先生から，以下のメールが送られた：「撮影では，お世話になりました。せっかくご協力いただいたのに，学生像がまったく放映されず，申し訳なかったと思います…」。メールを見た当時の私の心境を思いだすと，ショックと同時に，とても感動した。なぜなら，今まで先生からこのようなメールを受けた経験が無かったからである。

（2）使命感

2007年，調査で，北垣先生と一緒に中国に行ってきた。訪問先の浙江大学の教員から，エリート学生を養成する当該大学の「竺可楨学院」の話を紹介してもらった。その後の食事で，北垣先生は，中国と比べて，日本のほうがエリート学生を養成する意識は薄くて，国際競争力を上げるため，日本もこのような措置を採るべきだと話された。卒業した私は，この話をすっかり忘れていた。しかし，ある日，北垣先生から，『中国の学生エリート養成企画の調査―40余重点大学における優等的特別措置―』（高等教育叢書97号，2008年）の編集の協力という依頼を受けた。そして，3年後，『アメリカの学生エリート養成企画の調査―東海岸の23州立大学の優等学院―』（高等教育叢書111号，2011年）も完成した。使命感を持って2冊の本を編集された結果だと思う。

（3）探求心

探求心とは，誰も考えつかない新しい知見を得ようという姿勢のことだろう。私から見ると，北垣先生は常にこの姿勢を持ち続けている。例えば，授業を楽しくするため，北垣先生は「笑うコンピュータ」の開発を努力してきた。非常に挑戦的な仕事だろう。また，日本語・英語・中国語間相互の外国語 e-ラーニングを開発していると聞いたことがある。探求心があれば，きっと成果へと結実していくはずである。

私は本当に北垣先生に大変お世話になった。この場を利用して，先生に心から敬意を表するとともに，先生のさらなるご発展とご多幸をお祈り申し上げる。また，先生から学んできたことを活用し，自らの教育研究活動を積極的に進めることができると信じている。